

<研究ノート>

# 絵本の読み聞かせによる 子どものイメージの形成について — 子どものアート遊びを通して —

馬場 結子

(2013年10月15日受理)

## 要 約

本稿は、絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について、子どものアート遊びを通して考察するものである。「絵本のワークショップ」と題した講座(淑徳短期大学ボランティアセンター)の実施を通して調査・研究をした。子どもたちの年齢対象は2歳から6歳である。この講座を通して理解できたことは、子どもの発達という枠組みが時に制約を与えることがあっても、子どものイメージが強く介在するほどそうした制約は乗り越えられるということである。子どもは絵本の読み聞かせを通して、自分が主人公になったかのように感じながら、絵本を題材としたアート遊びを楽しむ。絵本のイメージが子どもにとって鮮明であるほど、またそれが自分のことのように感じられるほど、子どもの表現したいという意志が強くなり、発達の枠組みによる制約はクリアできることが理解できた。そうして、子どもは、絵本を通して自分自身を表現しているのである。

キーワード 絵本の読み聞かせ、アート遊び、表現、発達、ワークショップ

## 1. はじめに

近年、子どものために絵本の読み聞かせが、幼稚園や保育所、児童館、図書室等で盛んに行われている。絵本の読み聞かせはアメリカやカナダで始まり、それが日本に伝えられるようになった。たとえば、子どものための図書室で、おはなし会と称して30分程度ストーリーが展開される。内容は、絵本の読み聞かせに始まり、昔話等のストーリーテリングもあり、子どもたちはおはなしを享受する。本格的なものでは、おはなしの部屋において小さな蝋燭に火が灯され、静かにおはなしが語られる。それは、かつてまだ、子どものための本がなかった時代、暗い夜に、蝋燭のあかりのもとで子どものためにおはなしがゆっくりと語られた光景の再現である。おはなしは、昔から、大人から子どもへと語り継がれ、また、子どもの本が近代になって出版されるようになると、大人から子どもへと読み継がれるようになった。幼稚園や保育所ではこのように本格的なおはなし会は行われませんが、それでも大人(保

育者) から子どもへと、おはなしは確実に伝えられている。

筆者はかつて上記のようなおはなし会を子ども図書室で行っていた経験をもつ。どこからともなく20名近く集まってくる子どもたちを前に、おはなしの時間が設けられた。子どもたちは小さな椅子に座り、静かに待つ。小さな蝋燭にマッチの火が灯ると、おはなしが始まる。絵本の絵をじっと見つめながら子どもたちはおはなしに耳を傾ける。ストーリーテリングが始まると、子どもたちは語り手を見ながら、おはなしの世界に入っていく。子どもたちの様子は不思議な表情から驚きへと変化し、やがて真剣になり、じっくりと考え、顔きながら手には力が入り、ストーリーを追いかける。そして、いつしか笑みがこぼれ、子どもたちは安堵する。筆者はそうした経験を何度となく繰り返すなかで、子どもたちの想像の世界を覗いてみたいという考えがふと脳裏にかすめるようになった。一つの問いが浮かぶ。「子どもたちにはおはなしの世界が届いているのだろうか。しかし、それは目には見えない。もし、子どもたちの想像の世界を垣間見ることができたとするならば、そこにはどのようなイメージの世界が展開しているのだろうか」。

そこで、筆者はこれを確かめるために15人程度の子どもたちを集め、絵本を題材としたアート遊びを行った。絵本を1冊子どもたちに読み聞かせた後に、その絵本をもとにしたお絵描きや工作といったアート遊びを行うのである。「絵本のワークショップ」と題したこの企画は、平成25年度2月から数回に及び、筆者の勤務する短期大学で2歳から6歳までの子どもと保護者を対象に実施された<sup>1)</sup>。本論文では、この「絵本のワークショップ」に参加した子どもたちのアート遊びを一つの資料にしなが、絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について考察するものである。このような内容は、たとえば幼稚園や保育所の保育実践のなかでも実際に行われている。しかしながら、こうした保育機関では、年齢ごとにクラス分けが行われているのが常であり、たとえ異年齢保育が行われていたとしても、3・4歳児クラス、あるいは5・6歳児クラスというように、年齢幅を比較的近いところに設定している。それに対して、筆者の企画したワークショップでは、2歳児から6歳児という比較的幅の広い年齢層に焦点をあて、子どもの発達段階に応じたイメージの形成を考察していくところに特徴がある。それによって、子どもたちが年齢によってどのようにイメージが変容していくのかを一挙に辿ることができるのである。

以下に、絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について、さまざまな文献や子どもの作品を通して考察していく。そこから、子どものイメージとは何か、また、子どものイメージの特質や傾向、さらに子どもの年齢に応じたイメージの特徴等、子どものイメージの形成過程に注目しながら検討していくことにする。これまで、子どもの美術の心理学的考察は頻繁になされてきたが(たとえばPh.ワロンやリュケ、ローウェンフェルドにみられる先駆的研究が代表的なものである)、本稿のように、絵本の読み聞かせによる子どものイメージについての研究はあまり見られない。たとえば絵本研究において子どもの心理が明らかにされても、その研究は子どもの美術(絵本の内容を子どものお絵描きで示すような試み)から考察されたものではない。絵本と子どもの美術の融合的な研究はあまり見られなかったといえよう。本稿では、子どもの絵本研究の一助になるように、具体的に子どもの作品やさま

ざまな事例を示しながら考察していきたい。

## 2. 子どもと絵本の出会い

まず、絵本の読み聞かせとはどのようなものだろうか。大人が子どものために絵本を読む行為を通常、「絵本の読み聞かせ」という。この「読み聞かせ」という言葉には、強制的なイメージが含まれるように感じられるが、現在のところこのような言葉でしか表現する手段はなく、これが一般的に定着した言い方となっている。しかしながら、大人が子どものために絵本を読む行為自体は、大人と子どもが共にあって、さまざまなおはなしをイメージできる至福の時間をつくりだすものであり、想像の世界が醸し出されたものであるといえるだろう。

では、子どもは絵本の読み聞かせによって、どのようにおはなしの世界をイメージしていくのであろうか。たとえば子どもの遊びに詳しいW.ベンヤミンは、「子どもの本をながめる」という文章において、子どもと絵本の交わりについて次のように述べている。

絵本をながめる子どもにむかって、事物のほうがページからぬけだしてくるのではない。絵にみとれているうちに子どものほうが、絵の世界の色彩の輝きをたっぷりふくんだ雲となって、ページのなかへはいつてゆくのである<sup>2)</sup>。

絵本に子どもが参入していくところがここでは記述されている。子どもは絵を前にして、あたかも印象派の画家が一瞬にして色彩を帯びた風景を捉えるかのごとく、絵本の色彩の雰囲気を感じ取り、色のトーンを把握し、絵の情景をじっくりと眺めるのである。子どもはそうして絵本のなかの色彩に溶け込み、おはなしの世界に入っていく。続けてベンヤミンは次のように語る。

読んだり眺めたりしてつかまえた色を、のこらず自分のひだ飾りに仕立てあげて、子どもは仮面舞踏会のまんなか立ち、いっしょに踊る。「読んだり」といったのは、言葉もまたこの仮面舞踏会の仲間入りをして、鳴り響く雪片となって乱舞しているからである<sup>3)</sup>。

絵本は、絵と言葉から構成される。言葉からも子どもはイメージの世界を広げていく。絵本の絵には言葉が添えられるが、それが、絵画との違いである。絵画には言葉もしくは文章が添えられない。しかし、絵本の場合、言葉によって絵は説明され、物語られる。それによって、絵には情景が浮かぶように深みが増す。そして、言葉によって絵には主張が出て、たとえば絵のなかの人物が語り始めるように感じられる。つまり、絵のなかの人物に動きが出て、表情が出て、絵のなかのモノ同士に関係性がうまれるかのように感じられる。そのようにして子どもは言葉と絵によってイメージしながら、おはなしの世界を経験する。そのとき、まるで子どもは物語の主人公になったかのごとくに、おはなしの舞台上に立って役者となっ

て振舞う。子どもはおはなしを体現する。それだけ、絵本は子どもの心を捉えるのである。

では、子どもはおはなしの世界のなかでどのように振舞っているのだろうか。以下では、子どもが絵本を通して具体的にどのようにイメージしているのかを考察していきたい。

### 3. 絵本のアート遊びと子どものイメージ

次に、絵本による子どものイメージの形成について具体的な事例を通して検討していきたい。筆者はすでに述べたように、淑徳短期大学ボランティアセンターにおいて子育て支援の一環として「絵本のワークショップ」を企画・実施している。内容としては、2歳から6歳までの子どもと保護者を対象に、絵本の読み聞かせをおこない、それをもとにしたアート遊びを親子で一緒に楽しむというものである。参加者は概ね、本校近辺在住（東京都板橋区）の子どもと保護者であり、平成25年2月スタートからこれまで3回にわたり実施している。以下では、その成果をもとにしながら、絵本の読み聞かせによる子どものイメージの形成について考察していきたい。

#### 3-1 第1回「絵本のワークショップ」

第1回「絵本のワークショップ」は以下の要領でおこなわれた。

実施日 2013年2月22日（土）14時から15時30分

場 所 淑徳短期大学

対象者 2歳から6歳までの子どもと保護者

テーマ 絵本『はらぺこあおむし』の読み聞かせとアート遊び

材 料 トランスパレント、トレーシングペーパー、のり

進め方 手遊び（むすんでひらいて）、絵本の読み聞かせ、説明、アート遊び、絵本のビデオ上映、という順序で進めた。

第1回「絵本のワークショップ」で取り上げた絵本は、エリック・カール作『はらぺこあおむし』<sup>4)</sup>である。エリック・カールは1929年アメリカのニューヨーク州に生まれ、ドイツのシュツットガルト造形美術大学を卒業した後、再びアメリカに戻りグラフィックデザイナーとして活躍する。絵本『1、2、3 どうぶつえんへ』（1968年）でポローニャ児童図書館展グラフィック大賞を受賞し、その翌年にこの『はらぺこあおむし』を出版する。この絵本もアメリカやイギリス、フランスなどで受賞しているが、日本にも1988年に紹介されて以来、子どもたちに人気を博している。

おはなしの内容について説明すると、この『はらぺこあおむし』は、小さなたまごから生まれたあおむしが美しい蝶になるまでの成長を描いたものである。おなかを空かしたあおむしは、一週間さまざまなものを食べて過ごす。月曜日にはりんごを一つ、火曜日にはなしを二つ、水曜日にはすももを三つ、木曜日にはいちごを四つ、金曜日にはオレンジを五つ、というように。見た目も鮮やかな果物をあおむしは難なく食べていく。そして、土曜日には、

読者の子どもたちが喜びそうな食べ物（しかしおよそあおむしが食すとは思えないような食べ物）、たとえばチョコレートケーキやアイスクリーム、ソーセージ、カップケーキといった類のものを、あおむしは一気に平らげる。その晩、あおむしは腹痛で苦しむが、日曜日にみどりの葉っぱ（本来食べるもの）を食べて体調を整える。そうして空腹を満たしたあおむしは、蛹になって眠り続け、やがてその皮を脱いで色鮮やかな蝶に変身する。

この絵本を取り上げたのは、成長過程にある子どもたちに、生き物の成長の様子を知らせるためであり、食いしん坊で失敗しながらもやがて見事な蝶に変身を遂げるあおむしの姿に、自分の成長を重ね合せてもらいたいという願いからである。また、グラフィックデザイナーである作者のエリック・カールは、「絵本の魔術師」といわれるように色彩表現に優れている。コラージュという手法で作成された『はらぺこあおむし』には、さまざまな色彩の紙を張り付ける方法で鮮やかな色彩の世界がひろがる。子どもたちに色と出会い、色彩から多くのことを感じながらどのように作品をイメージしながら表現していくのかを学んでもらいたいという考えからこの絵本を取り上げた。

子どもたちに絵本の読み聞かせをした後に、アート遊びが始まる。今回のアート遊びは、トランスパレントという光を通す紙を使用することが目的である。この紙は薄い仕様であり、幼児においても簡単にちぎることができ、またスタンドグラスのように光を通すことで色彩が美しく浮かび上がる。そのため、これはシュタイナーの幼児教育ではしばしばオーナメントとして使われている<sup>5)</sup>。自然の彩光をオーナメント芸術を通して学ぶことができるのである。さて、まず筆者があらかじめ蝶の形を色鉛筆で描いておいたトレーシングペーパー一枚と10色のトランスパレント各一枚、のりを子どもたちに配布した。そして筆者は、トランスパレントはどのようにちぎってもよいこと（どのような形にちぎっても間違いはないこと）、紙のちぎれる音や感触を楽しむことを伝えた。さて、子どもたちはどのようにはらぺこあおむしの蝶をイメージしながら制作するのであろうか。

2歳の女兒。まだ蝶のイメージが湧かないのであろうか。数枚のトランスパレントが形も不揃いにちぎられて、蝶の形をしたトレーシングペーパーにはのりで不規則な並べ方で貼られていた。ただし、蝶の色彩については、これとは様相が異なる。女兒は赤とピンク、黄色とオレンジ色、青と緑色のトランスパレントを選び、少しだけちぎってトレーシングペーパーに貼った。心理学では、乳児は3～4カ月で色彩感覚に関して大人と変わらなくなり、この時期には、乳児は色を区別するだけでなく、赤や青、緑、黄色の色帯を認識できるようになるという<sup>6)</sup>。ただし、子どもは明度や色相に関しては容易に表現しやすいが、彩度の表現には困難を感じる<sup>7)</sup>。つまり、微妙な色合いの変化よりも、子どもは色の違いをはっきりと認識できるものを把握できることになる。この女兒の場合、そうした色彩心理学の効用があるのだろう。原色が多く使われた絵本のために、女兒は色を認識できたと考えられる。

3歳の女兒の場合。配布された10色のトランスパレントに女兒は喜びのあまり両手をあげた。女兒は色彩のグランデーションに魅了されたのである。子どもにとって、材料との出会いは重要である。たとえば、ピアジェとウェルナーの理論を継承しながら、子どもの絵とイメージについて研究していたナンシー R. スミス女史は、子どもの美術の指導経験から次



のように述べている。「もの世界、すなわち、感覚の世界で人間であることの意味を見つけだしたりするのは、彼らが材料に向かって探求するからである。子どもは、泥のもつ可塑性、岩の耐久性、触れることのできない光の輝きなどについて、考えたり、楽しんだり、形を作ったりしていく」<sup>8)</sup>。「子どもたちが出会うこのような多くの材料は、イメージや表現を形づくるのに役立つ、彼はすぐに自分でできることがわかり、それらを使う名人になる」<sup>9)</sup>。女兒はトランスパレントによって光の芸術を知り、光を通して色彩が美しく浮かび上がること、そこから色彩のハーモニーが奏でられるような色の効用性を知った。さまざまな色の輝きから、一つ一つの色が醸し出す雰囲気、色のもつ神秘さ、優美な感覚、鮮やかな印象といった特徴を女兒は理解したと考えられる。それから女兒は母親に手伝ってもらいながら、すべての色のトランスパレントを使い、絵本のなかの蝶に似た作品を仕上げた。

4歳の女兒の場合(図版1)。女兒は最初からアート遊びに関心を示していた。日頃からアート遊びが好きなのだという。そこで女兒の制作過程をじっくりと見てみると、次のようなことに気が付いた。女兒の使うトランスパレントの色は限られている。ピンクとオレンジ、黄緑色と黄色、そして紫色と青色が少しの配色である。それらの色のトランスパレントだけを女兒は丁寧に同じような大きさにちぎって、さらに色彩を均等に配分しながら貼っていく。筆者は思わず女兒に質問してみた。「どうしてこの色ばかり使うの? こういう色が好きなの?」。女兒は頷きながら答えた。「だって女の子らしい色なんだから。女の子らしく作るの」。女兒は自分の作品に女の子らしさを求めた。したがって、実際の絵本のなかの蝶とは異なる仕上がりである。それで女兒は満足なのである。つまり、女兒は女の子らしい趣きで自分の蝶を完成させたのである。たとえば、ヴィゴツキーは子どもの想像について事柄の再生だけではなく、そこには創造がみられることを示している。そして、後者の創造的活動を想像や空想(ファンタジー)と呼ぶ<sup>10)</sup>。つまり、子どもの作品は絵本の通りではないとしても、そこには子どものイメージがはたらくため、自分なりの創造的想像がみられるということである。さらに、こうした点に関しては、先述したナンシーR.スミス女史が子どものお絵描きにみられる特性(性別、年齢、タイプなど)を示し、そうした特性は、子どものなかでモノの基本的タイプを表すシンボルが確立した5、6歳ごろに見られる現象であると述べている<sup>11)</sup>。この女兒の場合、その指摘よりも少し早い年齢ではあるが、4歳でも子どもは性別に固執するのであり、ちぎり絵のような簡単な技法を使えばそれを表現することができるといえるだろう。(この女兒については次の節においてもさらに考察する。)

最後に、3歳の男児(図版1)。この男児の作品には大きな特徴が見られた。母親がそれを次のように話した。「これが息子の作品なのです。息子にはこのように見えたのです。蝶がまるで飛び立つように。蝶が飛んでいくイメージなのです」。確かに、男児の作品の蝶は立体的であり、ちぎったトランスパレントを何層にも重ねて積み上げるように貼られていた。それはまるで3Dの世界である。男児は、はらぺこあおむしだった蝶が今にも飛び立つように感じたのであろう。蝶の羽の色は絵本の通りであった。

このように、絵本の読み聞かせによる子どものイメージは、年齢によって特徴がみられる。たとえば色と形ということで今回のワークショップの子どもたちの作品を分析すると、2歳

児では形を把握することは難しいが、色を捉えることは可能である。3歳児になると、さまざまな色を楽しむことができ、それに応じて形も理解できるようになる。4歳児では、色の好みに特性が見られた。さらに4歳児からは性別を強く意識するようになるのである。簡単な技法を使えばそれを表現することは可能である。そして、3歳児では形を立体的に表現することができた。ただし、ナンシーR.スミス女史によれば、空間のデザイン（遠近法）は7歳以降であり<sup>12)</sup>、3歳児の現象としては考えられないことである。その意味では子どものイメージの形成は、年齢ごとに区分されない、むしろそうした枠組みを超えて分析されなければならないことのように考察される。おそらく、絵本の読み聞かせが、年齢的制限を超えて子どものイメージをひろげるものであると理解されよう。

### 3-2 第2回「絵本のワークショップ」

第2回「絵本のワークショップ」は次の要領でおこなわれた。

実施日 2013年6月22日(土) 13時30分から15時

場 所 淑徳短期大学

対象者 3歳から6歳までの子どもと保護者

テーマ 絵本『スイミー』の読み聞かせとアート遊び

材 料 色画用紙、はさみ、のり、クレヨン

進め方 手遊び(かたつむり、あたまかたひざポン)、絵本の読み聞かせ、説明、アート遊び、絵本のビデオ上映という順序で進めた。

第2回「絵本のワークショップ」で取り上げた絵本は、レオ・レオーニ作『スイミー』<sup>13)</sup>である。レオーニは1910年オランダ・アムステルダム郊外に生まれ、王立美術館でデッサンを学んだ後、イタリアに移住し、さらにチューリッヒ大学経済学部で学んだ後、アメリカに亡命し国籍を取得する。ニューヨークを拠点にしながらグラフィック・デザイナーとして活躍、1959年に最初の絵本『あおくときいろちゃん』を出版する。『スイミー』は1963年に出版され、日本では国語の教科書(2年生)に採用され、高く評価されている。第1回「絵本のワークショップ」で取り上げた『はらぺこあおむし』の作者、エリック・カールを絵本の世界へ誘った絵本作家である<sup>14)</sup>。

『スイミー』の内容は次のとおりである。海のなかで泳いでいた小さな黒い魚のスイミーは、ある日、自分の仲間の赤い魚たちが大きなまぐろに食べられるという事態に遭遇する。悲しみに暮れるスイミー。しかし、スイミーは海のなかの生きものたちに出会い、次第に元気を取り戻していく。そして、岩陰に隠れていた自分の仲間の赤い魚たち(生き残っていた仲間)に出会ったスイミーは、勇気をだして出てくるように諭す。仲間たちが悠々と泳ぎやすいように、スイミーは仲間たちと協力して、一つの大きな魚の形を描きながら海中を泳ぐ。その姿によって、ついにスイミーは大きなまぐろを追い出すことに成功したのである。

この絵本を取り上げたのは、まず、絵本のなかの海中の色彩が美しかったこと、青と水色、グレーと赤、ピンクと紫、ベージュ色、黄色と緑というように海のなかの色彩が七変化しな

がさまざまな生き物の様子をわかりやすく描いていたこと、またレオーニが（自身のユダヤ人迫害の苦しみもあり）、スイミーを通して力のない小さな生き物でも仲間と協力すれば恐ろしい生き物にも立ち向かえることを伝えていたことに依る。そしてこの時期のワークショップは6月の下旬で夏の始まりであり、季節感を考えて海のおはなしを取り上げることにした。

今回も絵本の読み聞かせの後に、アート遊びがはじまる。今回のポイントは色と形との出会い、そして技術的にははさみの使用である。スイミーを模した魚のアート作品については、スイミーが海中の美しい色彩のグランデーションを体感している様子を表すために、黒い魚の大きさの画用紙にカッターで7本ほど切込みを入れたものに、1.5センチ幅に切った色画用紙7色を虹色のイメージで編むことにした。これは、フレーベルの第一四恩物の応用であり、フレーベル幼稚園の他にモンテッソーリ幼稚園や保育所でもしばしば行われている<sup>15)</sup>。モンテッソーリ教育では手が子どもの発達を促すと考えられて、こうした手指を使う遊びが多く行われているのである<sup>16)</sup>。もう一つは、スイミーが小さな赤い魚の仲間たちと大きな魚になった様子を表現したアート作品であり、赤い魚の形をした色画用紙に、オレンジ色の色画用紙をはさみで三角形に数枚切ったのを貼り付ける。三角形で数枚きったものは小さな魚たちの「見立て」であり、それを赤い魚の形に張ることで全体的には鱗を表現したのである。赤とオレンジ色の画用紙を組み合わせることで、生き生きとして明るい元気な魚のイメージを表現した。そして、最後に白い画用紙にクレヨンで海を子どもたちに描いてもらう。広い面に手を自由に動かしていくことで、子どもたちに開放感を味わってもらうことが目的である。

3歳の男児。色画用紙の編みこみ（フレーベルの恩物の応用）は3歳児には難しかったと考えられる。母親の手伝いが多く見られた。また、もう一つの三角形を利用した魚についても男児は母親の助けを借りながら、はさみを使って色画用紙に描かれた魚を切った。通常、はさみの使用は4歳からできるものであるといわれている。この男児を例にあげると、はさみを使うことはできるが、整えられた形に切ることはできなかった。それでも男児ははさみで鱗の三角を楽しみながら切った。海の絵も男児は青いクレヨンを使ってリズムカルに上下に手の往復運動を繰り返した。はさみの使用とりのりの丁寧な貼り付けで神経を集中させたことから、こうしたなぐりがきのような手の運動は、自由でゆったりとした開放感を与えることになったと考えられる。

4歳の男児。はさみの使用は一人でできる。ただし、4歳の場合は直線を切ることができ、曲線は難しいのである。それでも男児ははさみで色画用紙の赤い魚を切っていく。色画用紙の編みこみ（フレーベルの恩物の応用）については母親の手伝いが少し見られた。

4歳の女児。日頃からアートが好きであり、アート遊びが得意なのだという。この女児は快活にすべての作品を仕上げていた。女児もはさみで直線を上手に切るが、曲線は難しいのである。しかし、魚の形は完成した。また、注目すべきは海の絵であり、この女児は青と紫、緑色のクレヨン3色を使いながら海を表現した。絵本の海の様子も水色、紫、ピンク色、青、緑色、グレー色、ベージュ色と変化する。女児はそうした海の七変化を印象深く捉えたのであろう。女児はクレヨン1本1本を丁寧に使いながら描いていた。



6歳の男児の場合(図版2)。この男児は運動あそびを得意とし、アート遊びは苦手であるという。最初は、はさみを使って三角形の鱗を作成するのが苦手であったが、ヒントを与えれば少しの努力で上手にできるようになった。のりもアドバイスにより上手に貼れるようになり、次第に男児はアート遊びを楽しむようになった。魚の鱗は貼り残しがなく、また海の絵もすべて青色のクレヨンで余白なく塗られていた。男児のアートは完成度の高い作品になった。

最後に、5歳の女兒(図版3)。この女兒は前回のワークショップの参加者であり、「女の子らしさ」に固執した作品を仕上げている。今回はどのように取り組むのであろうか。編みこみの魚(フレーベルの恩物の応用)は一人で苦心しながら仕上げた。その際、7色の画用紙の編みこみについて、女兒は赤とオレンジ、黄色の順に並べて編み、さらに青と紫、黄緑、緑色の順に並べるように編んだ。分析すれば、前者は暖かみのある色合い(暖色)、後者は冷たさの感じる色合い(寒色)ということになる。さらに女兒の感覚で言えば、前者は女の子らしい色合い、後者は男の子らしい色合いになるのかもしれない。それは、女兒らしい色の並べ方である。もう一つの赤い魚では、すべての鱗はあらかじめ決められていた三角形ではなく、丸い形に切られて、そこにはハートの模様が描かれていた。海の絵にも女兒はハート型のくらげを描いた。女兒にそれを尋ねると、「ハートで可愛らしくするの。女の子の魚なの」という。母親は「丸い形が好きで、そればかり普段から描くのです」と説明した。チゼックの後継者で子どもの美術教育に取り組んだハンス・シュトラウスの研究によれば<sup>17)</sup>、子どもの絵にはどこかに図形の形跡が見られ、たとえば人物画にもそうした形跡が確かめられるが、そうした子どもの図形の描写には年齢によって違いが見られるという。たとえば、3歳では丸い形、4歳では四角形、5歳では三角形が頻繁に描かれる。つまり、年齢に応じて子どもが頻繁に描く図形が変化するのである。そして、3歳児が丸い形を描くことには子どもの意識と深い関わりがあり、子どもは「自己を見い出す」ようになると丸い円を描くという。つまり、丸い形は「わたし」という意識の表れであり、自我の象徴である。この女兒の場合は、丸い形の色画用紙にハート型を描いて「女の子らしさ」を強調している。つまり、丸い形をつくることで自己という存在を示し、そこにさらにハート型を描くことで自分が女の子であることを強調しているのである。女兒の描く魚の目はユーモラスであり、女兒がこうした魚に満足していることが理解できよう。端的に言えば、女兒にとってこの魚は自分自身の象徴であると考えられるのではないだろうか。女兒は海のなかに潜って魚となって、スイミーや小さな魚たちと一緒に泳いでいる自分自身を想像したのではないだろうか。絵本の読み聞かせによって子どものイメージは形成されるが、女兒は絵本のなかで自分自身も魚となって泳いでいる主人公となったのである。

以上、『スイミー』のワークショップについて概観してきた。絵本の読み聞かせによるイメージの形成には、子どもの年齢によって認識の程度や技能には差がみられるため、そこからアートの表現力という点において違いがみられる。はさみの使用は3歳から可能であるが、3歳児は器用に扱うことはできず、4歳児の場合も直線を上手に切っても曲線が難しいのである。また第十四恩物の魚についてはようやく5歳から一人で取り組むことができるという

ように、子どものアート遊びには年齢による技術の制約がみられる。つまり、アート遊びには発達という制約が付き纏うことを意味する。しかしながら、子どもは絵本を通して魚に出会い、魚のアート遊びを通して魚と戯れる。絵本のなかの魚のようにイメージしながら制作する子どももいれば、いつしかそこからイメージをさらに膨らませて自分の考察した魚を表現する子どももいる。そこに、子どもの個性が溢れているように感じられる。そして、子どもたちは海を描いた画用紙に自分たちの魚を泳がせる。子どもたちは絵本の世界をアート遊びを通して表現したのである。

### 3-3 第3回「絵本のワークショップ」

第3回「絵本のワークショップ」は次のような要領で進められた。

実施日 2013年9月28日(土) 13時30分から15時

場 所 淑徳短期大学

対象者 2歳から5歳までの子どもと保護者

テーマ 絵本『ぞうのエルマー』の読み聞かせとアート遊び

材 料 画用紙、色画用紙、折り紙、ラッピングペーパー、和紙、クレヨン、のり

進め方 手遊び(おおきなくりの木の下で・げんこつやまのたぬき)、絵本の読み聞かせ、説明、アート遊び、質問に答える形式での説明、ピアノ伴奏による童謡(ぞうさん)の順序で進めた。

第3回「絵本のワークショップ」では、デビット・マッキー作『ぞうのエルマー』を取り上げた。デビット・マッキーは1935年にイギリスで生まれ、美術学校に在学していた時から風刺漫画の仕事を行なひ、後に雑誌「パンチ」や新聞に絵を描いた。この『ぞうのエルマー』は1989年に発表された代表作であり、20か国以上で出版されている。彼は、パウル・クレイに影響を受けたことから、その作品にはクレイの画風が確かめられる。

『ぞうのエルマー』<sup>18)</sup>の内容について説明すると、グレー色のぞうが多くいるなかで、エルマーだけがパッチワーク色のカラフルなぞうであり、それを気にしたエルマーは木の実を塗ってグレー色のぞうに変身する。しばらくはぞうの仲間たちに見つからなかったが、雨が降ってエルマーのグレー色は剥げ落ちてしまい、元のパッチワーク色のぞうに戻る。多くのぞうたちはそれを笑いながらも、「エルマーの日」を設けてこの日だけはすべてのぞうがエルマーのようにいろいろな色や模様アレンジしてパレードを行うことにした。エルマーはそうしてようやくぞうたちの本当の仲間になったのである。

このおはなしを取り上げたのは、エルマーというぞうが自分だけがほかのぞうと違うことに悩みながら、自分も同じようになると努力しながらも失敗すること、しかしそうしたエルマーの健気さがぞうたちの心を捉えて本当の仲間になったことの経緯を知らせたかったからであり、ひいてはワークショップ参加者の幼児たちがこれから人間関係を広げていく上で自分を見つめて、自分と他者の関係性をどのように築いていくべきかを学んでもらいたかった(さらにお互いに違いを超えて理解するということ)からである。また、この絵本の芸術

性には注目すべきものがあり、クレーに影響を受けたデビット・マッキーの絵には、子どもたちの色彩感覚を養い、デザインの楽しみを体験してもらう契機が含まれている。

絵本の読み聞かせの後に、説明をしてアート遊びを開始した。ぞうの制作は2種類。一つは、ぞうの絵が描かれた画用紙に色彩区画が施されたもの（エルマーを模したもの）で、子どもたちは区画ごとに好きな色をクレヨンで塗って色彩のハーモニーを楽しむのである。色彩区画は年齢ごとに異なり、2歳では4つの色彩区画、3歳では耳・肢・鼻といったぞうのからだの区別ができる色彩区画、4歳と5歳ではデザイン性を重視し、絵本のエルマーのように多くの色彩区画を設けた。子どもたちがどのように色を配置するのかということが注目すべき点である。もう一つは、グレー色のぞうの形を模した色画用紙に、模様のある色紙、ラッピングペーパー、和紙を自分の好きなようにデザインしてはさみで切つてのりで貼るといったもの（エルマーの仲間たちの制作）である。説明ではさまざまな紙の種類や質感を楽しむように伝えた。

2歳の女兒。ぞうのエルマーが4つの色彩区画に分けられた画用紙には、赤、青、黒、紫色のクレヨンでなぐりがきした跡があった。一つの色彩区画には赤色の線描だけが収まっているが、それは日頃から女兒が赤色を好んでいたからである。そのほかの色彩区画には、青をベースに赤と黒の線描が描かれたもの、青色と紫色の線描が描かれたもの、さらにその青色の線描が隣の区画にも侵入しているものがある。まだ色彩区画が十分には理解できないのである。しかしながら、一つの色彩区画に線描で半分しか描かなくても、女兒にとっては中途半端のように感じられない。すべての色彩区画を色で塗り尽くすことのない描き方でも、女兒はそれで完成したと考えている。そうして、女兒にとっては一仕事終わることができたからこそ、次の区画に臨むことができるのである。つまり、この年齢段階ではなぐりがきで子どもは十分に満足しているのである。その後、女兒は母親にはさみでぞうの形を切ってもらいながら、自分の作品ができる過程をじっと見守っていた。

3歳（1か月）の男児の場合。クレヨンの塗り方にはぞうの肢の部分と胴体部分の区別は見られなかったが（つまり、ぞうのからだの構造はまだ十分に理解されていない）、胴の部分の区画では色分けが行われていた。そのなかで緑色のクレヨンが多く使われたのは男児の好きな色であったからである。紙のデザインによるぞうは、適当な大きさに切つて貼られているだけである。

3歳の女兒（1か月）の場合。クレヨンのぞうの塗り方は黄色と茶色、青色、黒色のクレヨンでなぐりがきしたものであり、色彩区画は無視されていた（[図版4](#)）。まだこの段階では子どもは感覚的に絵描きをするということが理解できる。そのなかで注目すべきは小さな赤い丸印である。丸印は「わたし」という存在の自覚、つまり自我が出現してきた証拠である。女兒はなぐりがきのなかに赤い色の丸印を描いたのである。さらに、紙のデザインによるぞうは（[図版5](#)）、赤い模様のラッピングペーパーをちぎりながら集中的に中央部分に貼り付け、さらに模様のある色紙を周囲に貼っていた。赤い色が好きだという。女兒は赤い色を使いながら自分自身を表現しているのである。

もう一人の3歳（2か月）の女兒。この女兒はぞうの胴体の4つの区画の色分け、肢や耳、

鼻の区画の色分けが、線描で正確に行われていた。この女兒の場合、ぞうのからだの構造の理解ができると考えられる。さらによく見ると、一つの色彩区画に色が2色ずつ塗られている(図版6)。その色の組み合わせは、黄色と茶色、赤と紫色、黒と赤色、緑色と黄色、オレンジ色と紫色である。つまり、暖色と寒色を上手に女兒は組合わせていたのである。母親が日頃からこの女兒にはアート遊びに熱心に取り組ませていることを話した。そうした日頃の取り組みが女兒の美的感覚を養い育てたと考えられる。紙のデザインによるぞうは、母親の手伝いを借りながら、ラッピングペーパーや和紙などをハート型や星形に切って貼られ、デザイン性を重視した作品に仕上げられていた。

4歳(4か月)の女兒。ぞうの17の色彩区画にはすべて色が塗られている。まだ少し線描的な表現は残るが、次の段階の色を塗るという作業はできたのである。ただし、隣り合わせの色は同色を使うなど、まだ色の組み合わせの概念が生まれていない。紙のデザインによるぞうは、模様のある色紙、ラッピングペーパー、和紙といった質感の違うものを丁寧に貼られ、全体的に落ち着いた雰囲気に仕上げられていた(図版7)。

もう一人の4歳(7か月)の女兒の場合。ぞうの17の色彩区画にはすべて色が塗られ、さらに隣の色には別の色が塗られるなど、色の組み合わせもすべて綿密に考えて配色されていた(図版8)。

5歳の女兒の場合。ぞうの18の色彩区画にはすべて色が配色されている。また、この女兒は3回のワークショップにすべて参加しているが、前章でも紹介しているように、常に「女の子らしさ」を強調している子どもである。筆者はこの女兒にまた聞いてみた。「どの色が好きなの?」「ピンク色。でも赤色しかないから赤色で塗るの。」「黒色も使っているけれど黒も好きなの?」「黒は好きじゃないの。でも、いろいろな色を使わないと全部に塗れないから使っているの」。そう言うと女兒は、黒いクレヨンを見てしかめ面をしていた。女兒の作品を見ると、好きな赤色やオレンジ色が大きな区画にダイナミックに塗られて、そうした色彩をベースにししながら、さらに女兒は色彩のコントラストを表わすために、女兒にとって好ましくない黒色を使いながら仕上げている。しかし、女兒は青色や緑色も中央に配置して、ぞうは全体的にゆるやかな優しい色調に仕上げられた。もう一つの紙のデザインによるぞうについても、女の子らしい花柄のラッピングペーパーが主として使用されていた。優美なデザインのぞうが完成した。

子どもたちの作品から何が見えるだろうか。ナンシーR.スミス女史の理論を援用しながら分析してみたい。スミス女史は子どもの絵画教育において、子どもの年齢と技術の関わりを次のように規定している<sup>19)</sup>。まず、1歳半から3歳の子どものお絵描きは線描が多くみられ、そこには点やジグザグなど動きのある線が確かめられるという。そして、3歳から5歳の子どものお絵描きは基礎的な要素、すなわち線・形・色の発見がある。とりわけ、この時期の子どもは円形を描くという。また、美しい色彩の表現が可能になる。さらに、4歳から6歳の子どものは、デザイン性のある線・形・色を生み出していく。技術が備わった証拠である。このように子どもの美術は年齢ごとに変化する。こうした論拠を考察すると、確かに年齢と技術の問題は、筆者が今回行ったワークショップ参加者の子どもたちに該当する。ただ

し、筆者の考察では、子どもたちの日常の取り組みにより、全体的には上記の年齢よりも早い段階で技術が進むことも考えられる。さらに筆者の考察を加えれば、好きな色は2歳から見られる現象であり、3歳頃からは好きな色を通してデザインを生み出す傾向があることも確かめられた。そして4歳ではさまざまな色を配色しながらデザインを施すことが可能である。5歳児は好きな色をベースにさまざまな色彩をコントラストに使いながら、色彩の配色を全体的に考えたデザインを生み出す。それは、作品の芸術性やバランスを考えたことから生じるものであり、どこかに自分らしさを感じさせる作品となった。

さらに、この絵本がパウル・クレーの影響を受けたものであることを踏まえて、クレーの色彩作品との関連性を考察してみたい。クレーの色彩理論<sup>20)</sup>には、たとえば「青とオレンジのハーモニー」(1923年)のように明暗としての色彩(茶色の色調を基本に、オレンジを経て明るい赤まで色が上昇して、さらに冷めた灰色から青色までのコントラストが与えられる)、また「北方の花のハーモニー」(1927年)のように補色的な色彩も見られる。つまり、色彩が明るくなったり、暗くなったり、温かくなったり、冷たくなったりするような運動を伴う。いわば色彩の連続性がキャンバスに展開する。それは、一つのリズムを作り出し、明暗と寒暖の間でまるで長調と短調の音楽が奏でられるかのように連動し、構造化される。クレーの絵画では色の微妙な変化により、まるで音楽のリズムが呼応するかのようにさまざまな音色の美しい調べが空間全体に響き渡るのである。それは、一つの音が次の音を生み出し、さらに和音が生まれるというように楽曲が生み出されていく仕組みである。美しい音の連動がいつしかそうしたハーモニーを生じさせるのである。今回のワークショップでは、子どもたちにこうした色彩のリズムを体験してもらうことが目的であったが、それをどのようにイメージさせるのが課題であった。筆者の考察によれば、2歳から好きな色ができ、3歳で好きな色で丸い形をようやく描くことができるようになる子どもたちには、まださまざまな色を配色しながらデザインを生み出すことは難しい。4歳以降になると子どもたちは好きな色を持ちながらも多くの色を使いながらデザインの全体を考えて作品を仕上げるようになる。それは、子どもに湧き起こってくるさまざまな感情が多くの色に重ね合えられるからであり、自分のなかで調整しながら、個々の色彩の出会いや調合を試みる。そこからいわば色彩のハーモニーが生まれるのである。

ところで、色というものは子どもたちから自然に発するものなのであろうか。それは子どもの中からも自然に生み出されるまで待たなければならないものなのであろうか。確かに、子どもには好きな色というものがあるように、子どもは成長発達の過程で自然に色に対する認識が生まれていると考えられる。しかしながら、たとえば知的障害の子どもたちは本来、そうした感情や認識をあまり持ち合わせることはなく、自分のなかには色や形があることすら知らない場合があるという。しかし、それを子どもの環境によって、感性豊かに育てることによって自然に色彩と形が生み出されるようになるのである<sup>21)</sup>。このような素晴らしい子どもの変容を考えると、子どものアート遊びは子ども自身から発するものだけではなく、母親や保育者、教師といった大人との温かい交わりやケアから生み出されるものであると考えられる。そうしたなかで、子どもの自分らしさの実現が可能になり、より豊かにイメージが展開



される契機が見つけられるともいえるだろう。

#### 4 おわりに — エピローグ —

子どものイメージは広がるものである。そこには、発達という枠組みが時に制約を与えることがあっても、材料との出会いや教師からのヒント、母親の温かい励まし等により、決して狭められていくものではないことが今回のワークショップで明らかになった。子どもは小さな芸術家のように、真剣なまなざしで画用紙に向かい、クレヨンを持って描いたり、楽しそうにはさみを使ってさまざまな紙を切り貼りする。絵本の読み聞かせという行為が子どものイメージをさらに広げているのだろう。子どもは絵本のなかに入り込み、自分が主人公になったかのように感じながら、そのままその絵本を題材としたアート遊びをおこなう。たとえ技術的に難しくても、子どもは構うことはない。はさみを使うことが難しければ、子どもは手でちぎって表現する。表現したいという子どもの意志が技術を超える。そこには、子どものイメージが介在するからであり、絵本によるイメージが子どもにとって鮮明であればあるほど、ひいては子どもがそれを自分の事柄のように感じられるほど、子どもの表現したいという気持ちは強くなる。その際、たとえ子どもの制作した作品が絵本のもと同じように仕上げていなくても気に留めることはない。子どもはアート遊びをしながら、自分と向き合い、絵本のイメージと折り合いをつけながら制作していく。その過程に子どものつづやきやおしゃべりがある。そうした子どもの想いや考えがアートに実現できればそれほど素晴らしいことはないだろう。これまでのワークショップを通して、そうした子どもと絵本のアートの出会いが実現できたこと、また参加者が楽しみながらそれに取り組んでくれたこと、さらにこうした研究・教育の一環にご協力いただいたことに感謝しながら、ここに改めて子どもたちと保護者の方々に心から御礼を申し上げる次第である。

謝辞 本研究は平成25年度淑徳短期大学研究助成の補助を受けたものである。

#### 註

- 1) 淑徳短期大学ボランティアセンター（東京都板橋区）では乳幼児と保護者を対象に保育に関わるさまざまな企画を運営している。本講座「絵本のワークショップ」はその一環で平成25年2月から主に2歳児から6歳児と保護者を対象に、絵本を題材としたアート遊びを行っている。
- 2) W.ベンヤミン著、丘澤静也訳『教育としての遊び』晶文社、1981、P.25.
- 3) 同掲書、同頁。
- 4) エリック・カール著、もりひさし訳『はらぺこあおむし』偕成社、1988.
- 5) クレヨンハウス編集部編『おうちでできるシュタイナーの子育て』クレヨンハウス、2009.
- 6) ダフニ・マウラ、チャールズ・マウラ、吉田利子訳『赤ちゃんには世界がどう見えるか』草思社、1992、P.163-167.
- 7) アルバート.H.マンセル著、日高杏子訳『色彩の表記』みすず書房、P.42.
- 8) ナンシーR.スミス著、上野浩道訳『子どもの絵の美学 イメージの発達と表現の指導』勁草書房、1996、P.8.

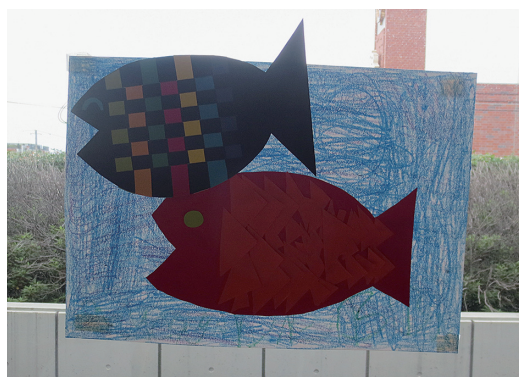
- 9) 同掲書, P.9.
- 10) ヴィゴツキー著, 福井研介訳『子どもの想像力と創造』新読書社, 1992.
- 11) ナンシーR.スミス著, 上野浩道訳, 同掲書, P.16.
- 12) 同掲書, P.126-129.
- 13) レオ=レオニ著, 谷川俊太郎訳『スイミーちいさなかしこいさかなのはなし』好学社, 1969.
- 14) 松岡希代子著『レオ・レオニ 希望の絵本をつくる人』美術出版社, 2013.
- 15) 新浦安モンテッソーリ子どもの家『モンテッソーリ園』東京書籍, 2012.
- 16) M.モンテッソーリ著, 吉本二郎・林信二郎訳『モンテッソーリの教育・0歳～六歳まで』あすなる書房, 2008.
- 17) ミハエラ・シュトラウス著, 高橋明男訳『子どもの絵ことば』水声社, 1998.
- 18) デビット・マッキー著, きたむらさとし訳『ぞうのエルマー』BL出版社, 2002.
- 19) ナンシーR.スミス著, 上野浩道訳, 前掲書, 勁草書房, P.12-14.
- 20) ハーヨ・デュヒティング著, 後藤文子訳『パウル・クレー 絵画と音楽』岩波書店, 2009.
- 21) 吉行淳之介・池田満寿夫「ねむの木の子どもたちの絵をめぐって」『ねむの木こども美術館』ねむの木学園, 1995, P.299-311.



右側の作品が4歳児による蝶の作品であり、女の子らしさに拘った優美な色彩である。左下の作品が3歳児による3Dの世界を表現したような蝶。特に羽の右側部分がトランスパレントによって、羽が何枚も重なり合わせたように表現された。

図版1

16



図版2



図版3





図版4



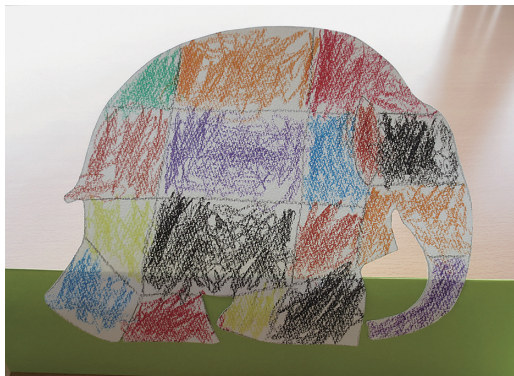
図版5



図版6



図版7



図版8